

「グローブの神様」

栗原 虎徹くりはら こてつ

ぼくが野球を始めたとき、お父さんがグローブを買ってくれた。ぼくのがれのプロ野球選手モデルの黒色でピカピカのグローブ。

ぼくはひと目で気に入って

「野球がんばるから!」

と必死におねがいしたら、

「お母さんにはナイショやぞ!」

と言って、お父さんのなげなしのおこづかいをはたいて買ってくれた。

ぼくは毎日お父さんと野球の練習をする。お父さんとの練習はきびしくむずかしい。だから、ぼくはときどきかんしゃくを起こしてしまう。

その日もそうだった。予想より高くはずんだボールがグローブをかすって顔に命中したのだ。

いたくて、くやしくて、いたくなくて。

ぼくはむしようにはらが立って、グローブを地面にたたきつけた。

そのとき、

「なにをしよんや! グローブには野球の神様が住んどるんやぞ! そまつにするな!」

とお父さんにめちゃくちゃおこられ、その日はもう練習させてもらえなかった。

「グローブに神様なんかおるわけないやん。」

なぜお父さんがそんなにおこったのか、ぼくには全ぜんわからなかった。

その日の夜だった。ぼくは夜中にトイレに行きたくなつて階段をおりて行くと、部屋から明かりがもれていた。

ふしぎに思って、そつとのぞいてみると、お父さんが一生けん命タオルでなにかをふいていた。

お父さんがふいていたのは、ぼくのグローブだった。

あとで聞いたら、ぼくがねたあと、お父さんは毎日こうしてグローブをみがいてくれていたらしい。

うまくボールがとれますように。野球が上手になりますように。野球の神様、虎徹がケガをしないように守ってやって下さい。

そうとなえながら。

それを知ったその日から、ぼくはやさしい神様が住んでいるこのグローブを一生のたから物にすることにした。

お父さん、仕事もいそがしいのに毎日ぼくの練習につき合ってくれて、ありがとう。

言葉にするのははずかしいから、作文にしたよ。

お父さんがみがいてくれたこのグローブで、いつかすごいプレーをして、ぜつ対におん返しをするからね。

ありがとう、お父さん。